



平成27年9月28日  
佛教大学附属幼稚園

## 植えてみよう 播いてみよう

園長 藤堂俊英

今年も幼稚園の前の水田には重そうに頭を垂れた稲穂がこがね色に実り、それを絵本やアニメから抜け出てきたような案山子たちが見守る姿を見るようになりました。稲穂といえば以前、幼稚園で稲をバケツで育てたことがありました。バケツ稲栽培の計画を先生から聞いた時、地域に根ざした教育でペスタロッツ賞も受賞された東井義雄先生が、お百姓さんから聞いたという次のような言葉をふと思い出しました。

下農は雑草をつくり 中農は果実をつくり 上農は土をつくる

そこで何とか稲作にふさわしい土が手に入らないものかと思い、佛教大学と交流のある美山からわざわざ水田の土を運んでもらったのです。モミ種播きからのスタートでした。貯蔵力に富むモミは堅い殻で覆われています。殻は大切ないのちをタイムカプセルのように包んでいますので、すぐには発芽しません。かわいい芽が殻から顔を出すまで、子どもたちにとっては期待と不安の入り混じった忍耐の時間でした。最近は何事も迅速性が優先され、待つことが出来なくなった時代だといわれます。いのちの成長には、その待つ・見守るという環境の確保が欠かせません。やっと発芽してくれた時の子どもたちの笑顔が忘れられません。お世話をした分、応えてくれることを知ってから、稲と子どもたちの会話が始まりました。稲の赤ちゃんを育てようねといっただけで始まった取り組みは順調に進みました。

ところが夏の終わりあたりから虫の被害が出始め、簡単にはゴールにたどり着かしてもらえない苦楽を味わいました。一粒のお米にも凝縮されている、育て・育つ長い道のり。それをおにぎりにして食べた体験は、がんばろうの種まき、なかよしの種まき、あいさつの種まきへと成長して行きました。

私たちの祖先が植えるとか播くという営みを始めたのは、恐らく定住を始めた頃だったのでしょう。人は胃袋の番人ではないといわれます。植えたもの播いたものを大事に育てれば、応えてくれるものがある、そのことを知った時、人は胃袋を満たしてくれるものだけでなく、こころを満たしてくれるものをも植えるように、播くようになったのでしょう。人の心もまた田畑のようにいのちを育てるパワーを秘めているとして、心田の開発を説いたのは東洋ではゴータマ・ブッダが、西洋ではアレキサンドリアのフィロンが最初であると言われていています。子ども大好きの良い寛さんに、「植えて見よ 花のそだため 里はなし 心からこそ 身は癒しけれ」

という言葉があります。子どもたちの独り立ちのためにも、心田にそれぞれの持ち味を宿した実りを育てられるよう、植える・播く・育てる、そして収穫するその苦勞と喜びをそっと伝えていきたいものです。

